1

トカゲの頭を持つ不気味な二足歩行の生物、レプティリアンがダストワールドに侵攻し、人類を滅ぼしてから長い月日が流れた。

塵と瓦礫に包まれた世界には日は差し込まず、鈍色の厚い雲が覆う。汚染された海は虹色の膜に包まれ、凄まじい油臭さを沸き立たせてネットリと波を立てる。

その上を通るハイウェイは、大地が突き出した半島部から内陸部へと向かって続いている。

それは美しい曲線を描いて辛うじて腐海の影響から逃げる様に走っているが、太い支柱は腐食と浸食で次々と崩れ、路面には深い亀裂が大量に走る。

今、崩落し途切れたハイウェイの上を走るのは車両では無い。背中に飛行用ブーストを装着したレプティリアンの兵士達である。

トカゲのような頭に加え、手足や尻尾もそれそのものの姿をしている。全身には深い緑色の鱗が覆い、微かな光源に反射して異様な煌めきを放つ。

人間を滅ぼした戦歴に相応しい体躯を誇り、分厚い胸板と割れた腹筋が薄汚れたプロテクターから覗く。重火器を抱える腕は、それそのものが凶器の様な頑丈さを感じさせる。

黒く巨大な両目をギョロリと動かしては、人間の残党がいないか執拗に徘徊し、その遺物を容赦なく剥ぎ取る。

脇に実弾兵器を抱えて隊列を組み、抵抗する者や反逆する者がいれば即座に迎撃し排除する。血も涙もない冷酷な態度で、敵の殲滅を実行する。

だが、レプティリアンも意思を持った生物であるが故に、時に気紛れである。変容を見せないダストワールドの空や海よりも時に激しく『欲望』は顔を出し、生物としての『本能』に支配される。

海岸から離れたハイウェイの中央、崩れていない支柱に支えられた路面の上で、今まさに欲望と言う名の本能がレプティリアンたちを突き動かしていた。

甲高い笑い声の様な鳴き声で互いに意思疎通を行いながら集合しており、その中央に置かれた二体の『獲物』を取り囲むように見下ろしている。

『獲物』は二人とも一見人間で、左右の手首足首を縛られ、自由に歩くことは愚か立つことも出来ず、屈辱の表情で歯を食い縛りながら身悶えている。

「くっ……ぬぅ、がぁっ！うあっ、あっあっあっあっあっあっ、はぁーはぁーはぁー！！そ、そんなトコまで触ん……ぁあっ！？ふ、ふざける、なぁ……っ！！」

一人は短く刈り揃えられた金髪と白い肌を持ち、黒いサングラスを装着した男であり、青い迷彩柄のプロテクターは無慈悲にも剥ぎ取られてしまっている。

プロテクターの中で蒸れた厚く逞しい胸板が艶めかしく濡れており、激しい呼吸に合わせて屈強な腹筋が激しく伸縮する。

露になった腋の下から無造作に生い茂る腋毛も金髪だが、滲み出た汗に濡れてしなやかに貼り付いている。

身悶えれば身悶える程汗が飛び散り、全身から蒸発する大量の熱気がレプティリアンたちの顔面を包み込み、男の微かな体臭を嗅がせてしまう。

「んっ、あ、うおっ！？おおおぉぉぉぉぉっ！！は、離しやがれ。この畜生がっ！！俺たちをこれ以上怒らせるんじゃ……んっ！んあぁあぁぁあぁぁあぁ……」

もう一人も男で、反対に黒髪のモヒカンヘアーと褐色の肌を持ち、サングラスを掛けている。プロテクターを剥ぎ取られているのは同じだが、青では無く赤い迷彩柄をしている。

その逞しい肉体美はもう一人の青い男同様に、筋肉の鎧とも言うべき屈強さを持っている。腋毛の濃さや首の太さと言った細かい箇所まで雄臭い雰囲気があり、劣勢な状態でもどこか余裕を感じさせてしまう。

情けない体勢で拘束されているにも拘らず、身悶えする度に必ず剥き出しになった胸板や腹筋、上腕筋が隆々と活動すれば、滑らかに汗に濡れた地肌は一層雄々しく筋肉の彫りを強調させる。

二人の大柄な筋肉野郎を虐げる様に、レプティリアンたちは弄んでいた。初めは単に殴る蹴るの暴行だったのが、徐々に嗜虐心の火を強めていく。

あるレプティリアンが、不意に青い男の股間を踏みつける。薄汚れた青いズボンに新たな汚れを擦り付ける様に、執拗に刺激する。

爬虫類特有の絶妙な柔らかさを持つ足の裏で股間を擦る様に踏みにじれば、男がその厳つい顔には似合わない嬌声を上げる。

すると、見る見る内に足の下で股間が大きく膨張し始めた。足の下で身悶えれば身悶える程股間が硬く盛り上がり、足の裏に直接体温が感じる程に熱を帯びる。

それを見ていた他のレプティリアンが、甲高い笑い声を上げながら赤い男にも同じように足を振り翳す。

同じように全体重を掛けて股間を踏み、敏感に反応する男の痴態を大勢で見下ろす。股間は青い男と良い勝負になりそうな程に膨張し、今にもズボンがはち切れてしまいそうになる。

レプティリアンたちは馬鹿にした表情を浮かべながらも既に理解していた。男たちがズボンの中で己の性器を勃起させていることに。その威圧的で屈強な姿を見せていた男たちが、性器への強い刺激で容易に興奮していることに。

それから更に男たちを虐めたい、興奮させたい、嬲りたい……と思考が過激になっていくのは、性処理が満足に出来ていない下っ端レプティリアンたちにとっては当然の流れだったのか。